野木小学校
同窓会報
第24号
平成25年12月
野木小学校同窓会編集部

# 大切なふるさと

第53回卒（昭和37年）
同窓会長（杉山）　竹村助雅

同窓会員の皆様方におかれましては、益々ご壮健でご発展のこととお喜び申し上げます。

今年度総会におきまして、山田前会長の後任として選出されました。その器でもない中、要職をお引き受けするに至り、大変恐縮しております。会員の皆様には、特段のご支援とご協力を賜りますよう衷心よりお願い申し上げます。

小学校の低学年、私たちは堤分校に通っていました。分校後地には、入学時に迎えてくれた大きなイチョウと山モモの木が残り、今も当時を思い起こさせてくれます。平井先生、岩本先生などお世話になった先生方が懐かしく思い出されます。四年生からは本校へ。堤のお宮さんまでしか行ったことが無かった私たち、世界が一気に広がりました。地道の曲がりくねった道を六年生の先導で、一時間近くかけて登校しました。

小学校を卒業し五十年余り、その間、二度の土地改良事業で町道や県道が美しく整備されました。また、昭和四十四年に校舎、昭和五十二年に体育館、昭和五十四年にプール、昭和六十年に運動場がそれぞれ竣工され、現在の野木小学校が形作られました。さらに、昨年末に校舎の耐震補強・リフレッシュ改修工事を終え、頑丈なブレスに支えられた安全性高い校舎、窓サッシの新調により風雨に強い校舎となりました。

しかし、九月に台風十八号がふるさと野木地区を襲い、豪雨の影響により、下野木集落では、野木川の氾濫、堤防決壊による床上浸水、床下浸水、また各集落で、土砂崩れや道路、田畑への土砂の流入など甚大な被害を被ることとなりました。被災された皆様に心からお見舞い申し上げます。

復旧につきましては、各集落とも役員さんを中心に総出活動が早急に行われました。また、野木公民館を拠点として、町外から多くのボランティアの方々にお世話になり、復旧作業が行われました。自然の怖さを感じると共に、復旧に向けた人々の温かい絆を強く感じることができました。ボランティアの方々には本当にお世話になりました。

今回の台風だけでなく、近年、天変地異を始め、日本国内はもとより世界中で日々、予想だにしなかったことが起こるなど、非常に変化の激しい情勢となっております。このような世の中で、私たちは「大切なもの」を見直す機会を与えられたという見方も一方ではできるのではないかと考えます。

家族、友人、生き方、仕事…大切なものはそれぞれにお持ちだと思いますが、「野木小学校卒業」という私たちにとっての共通点は、自分の歴史の中の大切なものの一つではないかと思います。

今回の会報紙が、全国各地にてご活躍される皆様方のさらなる旧交の一助になれば幸いに存じます。また、野木の子どもたちの健やかな成長と、野木小学校の益々のご隆盛を心からお祈りし、ご挨拶といたします。

# 退任のご挨拶

第54回卒（昭和38年）
前同窓会長（武生）　山田儀一

同窓会員の皆様におかれましては、益々ご健勝にてご活躍のこととお喜び申し上げます。

さて私こと、同窓会役員の任期満了により、三月末をもって職を辞させていただきました。在職中は評議委員の皆さんや学校の先生方に大変お世話になりました。また、会報執筆にご協力いただきました会員の皆さんには心からお礼申し上げます。

また今年も各地で台風による大きな災害に見舞われました。特に九月十五・十六日に襲来した台風十八号では、今までに経験したことの無いほどの豪雨により町内各地で土砂流出による道路の崩壊、家屋の床上浸水、田畑への土砂流入・冠水等大きな被害を受けました。

野木地区においても、野木川の氾濫・堤防の決壊により、下野木区や小浜市太良庄地区で多くの家屋が浸水被害を受けました。

被災されました皆様には心からお見舞い申し上げますとともに、県内外からいち早く駆けつけていただき、浸水した家財道具や土砂搬出に汗して下さったボランティアの皆さんにお礼申し上げます。

日頃は、のどかで自然豊かな野木の里ではありますが、いつやってくるか分からない災害に対して、日頃から防災対策を講じておく必要を感じております。

全国各地でお暮らしの同窓会員の皆さんにおかれましても、災害に対する備えを十分にしていただくとともに、今後の同窓会の活動に対し、ご協力いただきますようお願いし、退任の挨拶とさせていただきます。

# 十八号台風から学ぶ

野木小学校長　服部成男

先日の台風十八号で被災されました方々には心よりお見舞い申し上げます。

四百ミリを越える大雨には恐怖を感じました。もう少し雨が降る時間が長かったり、短時間で集中豪雨になっていたりしたらと思うとぞっとします。

野木地区では杉山で溝が土砂で埋まったため道の上を川が走ると言う光景がみられました。また堤と兼田の間で崖から土砂が流出して歩道と車道を埋め、三日ほど通行できませんでした。下野木では野木川の土手が決壊して床上一軒・床下数軒が浸水しました。

六十年前（昭和二十八年九月二十五日）に大きな台風が若狭地方を襲い犠牲者百名を越える大災害が発生しました。台風のコースが六十年前の台風十三号とまったく同じなのにびっくりしました。紀伊半島から志摩半島付近でゆっくり行く台風はたいへんこわいと感じました。

小浜市消防本部「台風十三号」災害報告書によると、「停滞前線と台風接近と云う二つの要素が重なり降雨も次第に激しくなり、雨量は実に四百六十三ミリの豪雨となり風も風速二十mの暴風雨となった。南川、北川を始め河川は氾濫し、堤防の決壊、山崩れ等が各所に起り浸水、全半壊、流失、埋没家屋が続出し被害は拡大の一途を辿り、消防機関、青年団等総出動して全市に亘り水防活動に懸命の努力をはらったものの、水魔の前に人力は及ばず大小の山崩れ崖崩れ山津波等は実に三百数十ヶ所にのぼり、これによる埋没及び全半壊家屋も相当数あり、堤防決壊三十ヶ所におよび全市は泥海と化し、死者、行方不明は市長を始め実に四十一名の多きに達し、当市空前の大被害を被った。」とありました。

災害は六十年に一度起こるとよく言いますが、近年の地球温暖化せいか、異常気象の災害がどうも増しているように思われます。

以前起こった災害からその時の苦労や知恵を学んで、今後起こりうる災害に少しでも対処していく必要があります。そしてかけがえのないふるさとを今までの経験を生かして少しでも減災を図り、守り続けたいと願う次第です。

## 旧職員からの便り

# グランドマスターのこと

（平成21年度～22年度　教頭）
岩﨑好信

同窓会事務局の教頭先生から原稿依頼をいただいた。「旧職員からのたより」ということである。確かに「旧職員」ではある。しかし、いまだに学校前の県道を通るたび、子どもたちの様子だけでなく「校庭の雑草は伸びていないか」「桜の木に毛虫は付いていないか」などと思わず見てしまう。小姑根性ではない。野木小学校時代に身についた習性である。

野木小学校は、事務方を務めた後、教頭職を拝命した最初の勤務校であった。職員室での仕事については、事務方での経験を踏まえ、また、すばらしい職員スタッフに支えられて比較的順調なスタートであったように記憶している。が、問題は、外にあった。

着任してから半月ほどったある日、兼田のT氏が、職員室を訪ねてきた。前任の教頭から、T氏には日頃から様々なことで学校がお世話になっており、特に前年度の「野木小学校百周年事業」では中心的な役割を担って下さったことを聞かされていた。ちなみに、彼は、私自身の高校時代の同級生でもあった。

とりとめもない雑談の後、T氏が「グラウンドマスターを学校まで運んだろか」と言い出した。それは何かと問うと、トラクターに似た乗用のグラウンド整備機械のことで、若狭町から借りることが出来るという。実は、T氏が職員室を訪ねて来た用件は、別に旧友と雑談するためではなく、若狭町「あじさいマラソン」の主会場となる野木小学校グラウンドの雑草が気になり整備が必要だと伝えることだった。

そんな機械を誰が動かすのだと問うと、もちろん教頭だと言う。我が家は農家ではなく、トラクターも動かしたことはないと伝えると、教えてやるからやってみろという。それならばと機械の運搬をお願いした。

数日後、その「グラウンドマスター」は、運ばれてきた。

ご存じのように、野木小学校のグラウンドはすばらしい。若狭町内で随一といってよい。だからこそ大きなイベントの会場となり、地域の方々も気にかけてくださっているのだと、それなりの使命感も感じ、機械操作の習得に臨んだ。ところが、あろうことかT氏は、機械をトラックから降ろすと「すまん。今日は、時間がないんや」と簡単な操作説明をして「がんばれよ」の言葉を残して消えてしまった。残されたのは、使命感だけでは動かすことの出来ない機械だった。

日頃トラクターを運転する農家の方にとっては笑い話であろうが、まさに悪戦苦闘であった。それでもどうにかそれなりに操作できるようになるものだ。ただ、何度か「ガガガ・・」「ガリガリ・・」といやな音はしていた。しかし、なにしろ動かせるようになるとなんでも楽しくなる。グラウンドを済ませると、せっかく機械を借りたのだからと校舎裏の広場やスキー練習用スロープにも機械をかけた。洗車も済ませ、その日はよい仕事が出来たと悦に入っていた。機械の返却運搬もT氏がやってくれた。

一週間ほどたったころ、町教育委員会から電話があった。グラウンドマスターの刃がボロボロで使い物にならなくなっているという。しかも刃の交換に8万円ほど掛かるので、野木小学校で払ってほしいという。真っ青になった。「ガガガ・・・」といういやな音は、刃の欠けていく音だったのだ。もちろん小学校にそんな金があろうはずが無い。ただひたすら「申し訳ありません」を繰り返し勘弁してもらった。もう二度とグラウンドマスターは使わないと心に決め、すぐさま自前で草刈り機を買った。

野木小勤務の間に、桜の毛虫消毒、松食い虫防除、ビニルハウス管理、大雪の除雪等々、同じようなエピソードには事欠かない。そのたびに、地域の方々に迷惑をかけ、本当に温かく支えていただいた。ただ、ただ感謝である。

拝

# 輝きのある野木の子たちと

（平成16年度～22年度 職員）

石倉元子

まだ春浅き四月。野木小学校駐車場に降り立ったとき、目に飛び込んできたのが「輝きのある野木の子」の迫力ある文字でした。それまで県道を通る機会のなかった私ですので、この時初めて目にした「輝きのある野木の子」は、本当に衝撃的で、それからの私の七年間を支える言葉ともなりました。

どんな子どもたちと出会えるだろうと高揚する気持ちを押さえつつの入学式。

緊張気味の一年生の手を六年生がしっかりとつないで、少し恥ずかしげに、でも誇らしげに入場する様は、見ていてほほえましく、これからの学校生活がより一層楽しみになりました。

生活科の学習では、武生の清水さんの畑を貸していただき、低学年でサツマイモを育てました。育てたと言っても、苗植え、たまに水やり、たまに草取り、収穫という行程しかできず、ほとんど清水さんにお任せでしたが、子どもたちはどの子も喜々として楽しみ、収穫に至っては大満足の活動でした。サツマイモのおやつを作った際には、清水さんにも食べていただこうということになったのですが、誰もが届けに行きたくて、誰が行くのかを決めるのに大騒ぎでした。言い合いをしたり、じゃんけんをしたりしながら決め、決まった時にはその子に大きな拍手をする子どもたち。何事にも一生懸命でした。

赴任三年目からの野木小学校はＩＣＴの研究を進め、ホームページに日々の子どもたちの様子をブログ形式で載せることが担任の楽しみの一つでした。授業や休み時間の様子をはじめ、各学年の集会発表や低学年主催の「おつかれさまパーティー」、児童会主催の「カラオケ大会」などなど、話題には事欠きませんでした。

途中産休・育休を含め七年間にわたりお世話になった野木小学校は、まさに輝きのある子どもたちとの出会いの場でした。そしてその周りには必ず温かいご支援をいただいた保護者の方々、地域の方々がいらっしゃいました。今でも出会うと「先生、元気？」「今どこの学校？」「子ども大きくなった？」等と声をかけてくださる方々や、もうすっかり大人びてはいるけど当時の面影そのままの笑顔を向けてくれる子どもたち。多くの貴重な出会いをいただいたことは、教員として大きな財産となっています。

末筆になりましたが、野木小学校・野木小学校同窓会・野木地区の皆様のますますのご発展を心よりお祈り申し上げます。

## 会員からの便り

# 小学校時代の風景

第52回卒（昭和36年）

石田久一

還暦を過ぎて五年が経ちました。小学校時代の同級会の案内状が届き、私はそれに参加することにしました。行き先は芦原温泉で、男女合わせて十四名でした。いつも合っている者もいれば、数十年ぶりに再会した者もいます。あれこれ話している内に、みんなの顔が小学校時代の懐かしい顔に戻っていきました。思い出が思い出を呼び、本当に楽しいひとときでした。

私が小学生の頃は、家の前（県道）に木材を運ぶ馬車が通っていました。乗り合いバスはボンネットバスでした。エンジンストップをすると、車掌が外に出てバスの前でクランク棒でエンジンをかけるという、今では見られない昭和の光景です。田んぼは殆どの農家が牛で耕作し、手で田植えをしていました。その後の草刈りも、暑い中、主に女性が頑張って行っていました。秋の稲刈りは、手で刈り込み、干してからの脱穀でした。私の家も同様でした。とりわけ牛は大事に扱われ、家族のようなものでした。幼いながらも私はエサを与えたり、ブラシで体をこすったりし、勉強より家の手伝いをたくさんしていたように思います。また、農閑期には、夜になると野木小学校の講堂で映画が上映されました。それは、主に時代劇が多かったように思います。鞍馬天狗、弥次喜多道中等々が上映され、大人にとっても子どもにとっても楽しみな行

事の一つでした。

また、その頃の遊びと言えば、春夏秋冬で様々でした。春には上級生に教わりながら竹で弓、刀、杉鉄砲等をつくりました。ちゃんばらごっこをしたり、弓矢の飛距離を競ったり、杉鉄砲の音を楽しんだりしましました。近くの小川ではメダカやドジョウなどを夢中で網で追いかけました。杉山川の下流でも、手作りの竹竿で魚釣りをしていました。なまず、ふな等がよく釣れました。夏休みになると、みんなで北川へ毎日泳ぎに行きました。深い所に入り、何度か溺れそうになった記憶もあります。秋になると、今度は山の味覚を楽しみました。クリ拾い、あけび採り、松茸狩りをしました。松茸は、見つけるのが難しく、数えるほどしか採れなかった事を覚えています。冬はスキーやそりで遊びました。孟宗竹を切り、スキーの形を火で焼いて作りました。全てが手作りでした。指を切りながら作った自分だけのおもちゃで、仲間と日が暮れるまで野や山を駆けずり回りました。そのような子ども時代でした。

これらの私の子ども時代の光景は、今の子どもたちには考えられないものだと思います。時代は速い速度で大きく変化しておりますが、いつの時代でも純真な子どもたちの心は美しいものだと私は思います。この野木で、素直な心を大きく育み、変化の時代に負けない逞しい子どもたちに育ってほしいものです。

同級会に参加して、私は、昔の仲間は、途中で連絡しない期間があっても、変わらず仲間である事を感じました。私が覚えていないような事を、旧友は覚えていたりもして、話がとても盛り上がりました。小さい頃と性格が全然変わらないままの人もいました。変わったのは目に見える光景だけです。中身は変わりません。今回の同級会をきっかけに、旧友という仲間とこれからまた時間を共有し、楽しく過ごす事が出来る事がとても楽しみです。

# 思い出探しと近況報告

第68回卒（昭和52年）
群馬県　伊藤照美
（旧姓　小野）

今回この同窓会報の寄稿依頼を受け、何を書かせていただこうかとても悩み、野木小学校時代の学校と家庭内の思い出などを思いついたまま書き出していくことにしました。

雨が降ろうが雪が降ろうが雷が鳴ろうがなにがなんでも歩いて登下校、嫌いなものを残してはいけなかった給食、運動会のときやらせていただいた鼓笛隊のバトン、冬でも体育はブルマ（確か）、燃えた卓球大会、遠足のようで楽しかった写生大会。

放課後、友達と校庭で暗くなるまで四葉のクローバーを探したこと、楽しかった臨海学校、北川で泳いで遊んだこと、ピンクレディーの振り付けを覚えたこと、遅い時間の放送なのに百恵ちゃんの赤いシリーズを楽しみに観ていたこと、紅茶はいいのにコーヒーは飲ませてもらえなかったこと。

捨て猫を拾い友達と内緒で育てていたこと、しかもその猫は祖父が捨てた猫だったこと、屋根の上では柿をもいで食べた。柿にスモモやグミに枇杷と、家の庭はおやつの宝庫だった。グリコのおまけを集めて友達とおままごとをして遊ぶのが好きだったことも思い出させる。

マッシュルームカットにオオカミカット。今思うと流行に敏感だったのかも。ピアノを習っていたのにピアノを買ってもらえずオルガンの限界を感じ辞めたこと、学校のカーテンにくるまって遊んだこと。

東小浜まで汽車に乗り友達と一緒にソロバンを習いに行っていた。かつ丼はソース、この頃からへしこが好き。

町と言えば小浜。学校の前にバス停があり、堤から乗ってくる祖父と一緒に小浜の耳鼻科に通った。そのバスを待つのが好きで、遠くに見えてくるとワクワクした。耳鼻科の帰り「はまがわ」の卵とじうどんを食べるのが好きだった。

祖父は大相撲が好きで、よくテレビを観ていた。友達とお相撲さんの塩まきを真似して大笑い、オロナミンCに玉子の黄身を入れて飲んでみる。夏は真っ黒、親は仕事と田んぼで忙しかった。

下の名前が難しかった校長先生から教わったことわざ、「勝って兜の緒を締めよ」など、野木の里で大事に育てられ大きく育ちました。

まだまだ思い出せば出てきそうですが長くなりそうなのでやめておきます。笑って読んでいただければ幸いです。考えてみればそれら全てが私の原点になっているような気がします。

今は元力士の夫と結婚し、草津温泉にある日本相撲協会の保養施設に住み、職員として働いています。角界もいろいろと大変な時期もありましたが、最近ではチケットの売れ行きも好調で、おかげ様で相撲人気を取り戻しつつあるようです。

温泉が大好きだった父や、大相撲が大好きだった祖父に生きているうちに何も恩返しは出来ませんでしたが、こうして私が毎日温泉に入り、相撲関係の仕事をしている状況を、きっと天国で喜んでくれていると思います。そして実家に帰るといつも変わらない笑顔で迎えてくれる母をもっと大事にしていこうと改めて思います。

## 現在と思い出

第83回卒（平成4年）
下野木　倉谷浩成

私は現在若狭テクノバレー内の紙管工場に勤務しています。本社は大阪にあり国内六工場、海外に一工場規模の企業です。

先日知り合いの方に同窓会報に寄稿してほしいと頼まれ、今回このような機会をいただきました。

さて、何を書こうか？

悩んでも出てこないので、小学生気分に戻り、素直に書きたいと思います。

私は今年で三十四歳になります。野木小学校を卒業し、早いもので二十二年が経ちました。

私のクラスには同級生が十九名いました。毎日が楽しく、幼なじみの親友たちと勉強や遊びを精一杯しました。

しかし、現在となっては連絡が取れるのも二人か三人程度、寂しいかぎりです……

ほとんどの同級生が県外に出て故郷に帰ってこない状況です。私は地元から出たことのない人間ですので、故郷の移り変わりに鈍感になっていますが、県外に出た皆さんはどう思うのでしょうか？

あの学校の帰り道、よく遊んで帰った土場、春には道端に芽を出すふきのとうに春を感じ、夏には川遊びや虫取りに励み、秋には山の紅葉をみて、冬になれば除雪で壁になった雪塊で雪合戦など……ここでは、書ききれない程の思い出をもらった六年間でした。

今思えば小学校時代の六年間が人生の中で一番楽しかったと思います。

時が経つのも早いもので、同級生の中で一番早くに結婚をし、十年目の年を迎えました。二人の子供にも恵まれ、平凡ではありますが幸せな家庭を築けています。

上の子は私の母校の野木小学校に通いもう四年生になり、毎日楽しく勉強、運動に励んでいます。

先日、子供と一緒に自転車で学校まで行きました。自転車に乗りながら子供に思い出話をし、子どもが昔の話に驚きを感じていたのが、思い出されます。

私たちが体験したことをもっと伝えていきたいなと思う所ですが……。

最後になりますが、私は野木の子で野木に生まれてよかったと思いますし、子供たちにもそう思ってもらえる環境を作ってあげたいと思います。

## タイムマシン

第85回卒（平成6年）
武生　福田浩伸

自分が野木小に通っていた頃のことを改めて思い返してみる。

「……」

何というか、存外思い出が出てこない。走馬灯のように次々と頭の中を巡るんだろうなんて思っていたが、実際そういうものではないのだろか。

少し時間を掛けて、深くそれこそ深海の砂をゆっくりとすくうかのように思い返してみた。すると完全ではないが、より印象強い記憶が断片的に蘇ってくる。

ひとつ、四年生になるまで補助輪付きの自転車に乗っていたとか。

ひとつ、家庭科の授業でできなかったエプロンを母親に仕上げてもらい、翌日先生に怒られたとか。

「…ろくな思い出がなかった」タメ息など吐いてしまった。まだ何かあるはずだと意気込むには十分すぎる『思い出』

たちだったと思う事にする。
　すると、良いものをと、若干意地になっていた脳内に稲妻がスパークした。
　それは小学校六年生の時の運動会。現在とは異なり児童が多かった為、赤青白黄と四色の組だった。競技も全員リレーではなく、高学年と低学年に分かれてのリレー。時間の流れを嫌でも感じてしまう。
　当時、走るのが好きだった私は運動会のリレーが大好きだった。メンバー全員で長い距離を力を合わせて走り抜く。箱根駅伝ではないが、一本のバトンを繋いでいくのは素晴らしいことではないだろか。
　そんなリレーのアンカーを六年生の時には経験した。スタートの号砲と共に四色の鉢巻きを締めた第一走者達が動き出す。バトンが次々と走者を結び、いよいよ私のひとつ前の走者が走り出した。目線の先に映るのは自分の組を示す赤い色。しかし、その前には他色があった。すなわち、赤組が二番だという事。二色の差は広がりも縮まりもしない。拮抗した状況のままアンカーの出番が訪れる。
（絶対に抜いてやる！）
　託されたバトンを強く握りしめる。両足が鋭く回転し、僕の体を前へ前へと突き動かす。と同時に前を走るランナーとの差が詰まって来た。（いける！）周りの景色が吹き飛び、前との距離はさらになくなる。集中していた。
　ゴール手前、数m。僕の体が並び、ぐいっと前に出た。
　赤組優勝。誰が撮ったのか覚えていないがその時の写真がアルバムに貼ってあった。
　今では足も遅くなり、リレーに出場するのも億劫ではあるが、当時の写真を見つけて、走るのを鍛えてみるかなんて思っていたりする。
　こうしたキッカケになることが小学生時代にもっとあるかもしれないのなら、それを思い出すことは決してやぶさかではない事だ。

## 新成人からの便り

# 今とあの頃

第97回卒（平成18年）
中野木　武田一徹

　今の私の原点は、小学校だった頃の私だ。ふと振り返ってみると、つくづくそう思う。野木小学校を卒業してから、もう十年近く経つ。大学二年生になった今、自分なりではあるが、少し大人になったなあと感じることもある。しかし、一方では、あの頃の自分と今の自分がほとんど変わってないんじゃないかとか、むしろ今の自分の方が劣化した部分もあるかもしれないという思いもある。
　私は、今もあの頃も負けず嫌いだ。体育のドッジボールなんかでは、毎回のように大声を出し、目をギラギラさせていたように思う。
「オレにボールを渡せ！」
「オマエは投げるな」
「何やっとん！」
　あの時、怒鳴ってしまった下級生。怖かったでしょう。ごめんなさい。負けるのが本当に嫌だったのです。また、ある時は小学校のマラソン大会にて、私が四年生のとき、何人もの上級生を次々に追い抜いていった。それがうれしかったし、楽しかった。運動会でも、プールでも、とにかく勝負事になると燃えた。ギラギラした。
　私は、あの頃の冬が今より好きだった。やけに寒く、静かな夜。わくわくしながら眠ると、朝、一面の銀世界が窓の外に広がっていた。庭もあぜ道も、田んぼもすべてがプレイグラウンドになった瞬間である。一番好きだったのは登下校の時間。特に帰り道は最高だった。友達と隊列を組めば、気分はもう南極探検隊だ。学校から家までのほんの数キロの道のりが、あの頃の私にとっては、大きな大陸のように思えた。少し、道をはずれて田んぼの中に入ったときには
「遭難したぞ！」
　なんて言っていた。雪の中では、時間が止まっているかのように思えた。特に大粒のぼたん雪がしんしんと降っている時は、時間が止まっているかのように思えた。特に大粒のぼたん雪がしんしんと降っている時は、時間だけではなく、音もなくなっていた。そんな不思議な世界の中では、知らず知らずのうちに、時間がどんどん過ぎていった。たくさん遊んでいるはずなのに疲れも感じなかった。私は、今よりあの頃の方が世界が大きく、楽しいものに見えていた。しかし、必ずふいに現実世界に引き戻される。それは、家に着いて「ただいま」と言う瞬間だ。
「ただいま」と共に大冒険は終わりを告げ、不思議な世界

は窓の外に広がるアナザーワールドになる。そして、遅れて疲労がどっと襲ってくるのだ。だが、それは決して悲しいことではなかった。なぜなら、ストーブのある温かい部屋、こたつとみかん、テレビ、台所からの夕飯のにおいや調理の音が心地良かったからだ。私は、今もあの頃の我が家が好きなんだ。

久しぶりに、あの頃の自分と向き合った。彼は、鏡に映った自分自身のようにも見えたし、まったく別人のようにも見えた。

今も確かに負けず嫌いだが、あれ程までに何かに燃えたり（周りが全く見えないくらいに）目をギラギラさせたり（周りの人が引いてしまうぐらいに）という機会は少なくなったように思う。少し劣化したんだろか。ただ、今だにマラソンは続けている。なんで走るのが好きなのか。考えてみるとやはり、あの頃の自分が感じた楽しさ、喜びに行き着く。おそらく、それを原動力にこれからも走り続けるだろう。

私は、冬が好きではなくなってしまった。寒いのが苦手で、もう雪で遊んだりすることもなくなった。冬は、家の中にこもってしまう。あの頃、毎日が楽しかったことを思うと、うらやましく感じてしまう。大人になるにつれて、世界が狭く、汚れて見えるようになってしまう。なんかさみしい。

私は、あの頃よりも我が家が、そして地元が好きになっている。大学進学のために地元を離れてから二年。離れて初めて地元のすばらしさを実感した。今、私は大学で地域活性化について学んでいる。それは、私が地元から与えられた、やさしさ、愛のような、何か温かいものに対して、将来、恩返しがしたいという思いがあったからだ。それはつまり、あの頃の思い出が、今の自分を動かしているということだ。まさに、原点であったように思う。

# 近況報告

第97回卒（平成18年）
中野木　能世　穂奈実

野木小学校を卒業して八年、私は今神戸の地で大学生活を送っています。最初は心配だった一人暮らしにも存外早く慣れて、早いもので大学生活も一年半を越えました。

大学では文学部に入り、二回生になってからは国文学を専門として勉強しています。自分の興味に即してとりたい授業を選べるというのはもちろんのこと、授業の内容も基本的には一冊の教科書に書いてあることを順番に教えていくというのではなくて、先生が決めたテーマに沿ってさまざまな資料を使って話をしたり、学生が自ら資料を作って発表、議論したりと授業によって内容や形式もさまざまです。今では授業も専門的な内容が増え、レポートや発表の調べものに追われて大学の図書館にこもることも増えて、去年よりも忙しくなったような気がします。新しく知ること、興味深いと感じられることを大学に入ってからたくさん勉強できていると思います。

課外活動では吹奏楽部に所属し、中学で始めたクラリネットを大学に入ってからも続けています。年二回ある演奏会に向けての活動のほか、野球やアメフトの試合に出向いてスタンドで応援するなど、応援団としても活動しています。この部活に入って、こうなりたいと目標にできる先輩や、時には衝突しながらも支え合ってきたかけがえのない同級生の仲間、本当に多くの人と出会い、さまざまな経験をしました。自分の責任で考えなければならないことが増え、大変なことや面倒なこと、落ち込むこともありますが、忙しくも楽しい、充実した日々です。

最初は不安だった独り暮らしも慣れれば気楽なもので、毎日の大学生活の中では、特に実家が恋しくなったりはしません。でも、帰省して家族のいる環境に改めて身を置いてみると、家族がいることのありがたみが実感できます。自分で作らなくても複数の種類のおかずが食べられること。同じテーブルで一緒に食べな

がら話ができること。神戸から離れて野木の自然に囲まれると、大学生としての生活から離れ、時間が止まったような感覚を覚えます。そうしてゆったり過ごすうち、時間は信じられないほどはやく過ぎてしまいます。どんなに離れても、帰ってくる場所、おかえりと言って迎えてくれる場所があるというのは本当に幸せなことだと思います。

先日、二十歳の誕生日を迎え、ついに成人となりました。周りにたくさん支えられて今の私の存在があります。一人で暮らしはしていても、一人で生きているわけではありません。そんな周りの人々に感謝の気持ちを忘れることなく、残り半分強になった大学生活を最後まで充実したものにできればと思います。

## 児童作文（家庭の日作文）

# 感謝状

六年　杉谷昂亮（上野木）

「おじいちゃん、おばあちゃん、ありがとう。」ぼくは、感謝の気持ちでいっぱいです。

ぼくのおじいちゃんは七十九歳で、十年位前に心筋こうそくになりました。たくさんの薬を飲んでいるけれど、今も元気で仕事をしています。おばあちゃんは七十二歳で、やさしくて、料理が上手で、畑でたくさんの野菜を作っています。

おじいちゃんは、いつも夕食を食べている時、

「昂亮は、赤ちゃんの時よう泣いたんや。そのたびに、抱っこしてゆすってやったんやで、覚えとるか。」

と言います。ぼくは覚えていないけれど、その話を聞くたびに大切にされていたことを感じます。

おばあちゃんは、ぼくが小さい時、よく散歩に連れて行ってくれました。夕方遅くでも、ぼくが「行きたい」というと連れて行ってくれました。そして、おばあちゃんの抱っこと頭をなでてもらうのが大好きでした。

小さい頃は、いつもおじいちゃんとおばあちゃんについて、畑や田んぼに行きました。そこで、焼き芋や栗拾い、カブト虫の幼虫探しをしました。雨の日は家の中で、すもうとりやカルタ、紙飛行機を作って遊んでもらいました。戦争のことも知っていたので、その話も聞かせてもらいました。ぼくの楽しい思い出です。

小学生になると、おばあちゃんは見守り隊でぼくを迎えに来てくれました。一年生の時は、見守り隊の当番の日でなくても毎日来てくれました。小さかったぼくを心配して来てくれていたのだと思います。夏になると、家に着くと、汗びっしょりになったぼくの顔や体をタオルでふいてくれました。今思うと、「そんなことまでしてもらってて」と少しはずかしくなりますが、ぼくのことをいつも大切にしていてくれたことを感じます。

今でも、おじいちゃんとおばあちゃんは、ぼくが学校から帰ってくる時間には、家で待っていてくれます。田んぼや畑が忙しい時期は家の外で待っていてくれて、

「昂ちゃん、お帰り。」

と言ってくれます。ぼくは、この言葉がとてもうれしいです。ぼくのお母さんは仕事をしているので、おじいちゃんとおばあちゃんがいなかったら、ぼくは一人でさみしかったと思います。でも、二人がいたのでさみしいと感じたことはありません。赤ちゃんの頃から、たくさんの愛情で育ててもらって感謝しています。言葉にしてなかなか言えないけれど、心の中ではいつも「ありがとう。」と思っています。

小さかったぼくは、おじいちゃんとおばあちゃんを追いこすぐらい背が高くなりました。機械の説明書を読んで、使い方を説明してあげることもできるようになりました。これからぼくができることは、少しずつ手伝いをすることです。だから、おじいちゃんとおばあちゃん、無理をせずに体を大切にし、いつまでも元気でいてください。

# ぼくのひいおばあちゃん

五年　内藤海斗（兼田）

ぼくには、ひいおばあちゃんが一人います。家にはいませんが、ぼくのお母さんの実家にいます。お母さんの実家は、奥田縄という所です。そこには、じいちゃんとばあちゃんとひいおばあちゃんがいます。おばあちゃんが二人いるので、みんなで、小さいばあちゃんと大きいばあちゃんと呼んでいます。

大きいばあちゃんは、三人で住んでいますが、他の二人が仕事でいない時もあります。そんな時は、ばあちゃんは大人だけど、心配になって夜中ずっと電気をつけたまま寝ています。一人だととても不安になるみたいです。

また大きいばあちゃんは、年をとって少しぼけてきました。年は今年で八十七才です。野菜作りが好きで、昼間は畑をしたり、せんたく物を干したり、そうじをしたりしています。それくらい元気です。でも、薬を飲んだか分からなくなったり、人が写真の中に入っているように思ったりします。ぼくや妹やいとこの写真が家にかざってあります。だれもいないと、大きいばあちゃんは写真にしゃべりかけたり、

「お菓子、食べるかあ。」

と、お菓子を写真の前に置いたりしているようです。

ぼくたちが遊びに行くと、

「よう来たなあ。」

と笑ってむかえてくれます。

そして、ご飯は食べて来たと伝えても、

「なんか食べな。おかしあるで。」

と、何度も言います。それから必ず、

「今日はとまって行くんか。」

と聞きます。きっとみんなの顔が見れるとうれしくて、少しでも長くいてほしいんだと思います。

また、お母さんに

「いつ、写真から出てきたんや。」

といつも聞いているそうです。お母さんは、

「もう出てきて遊んどるで。」

と答えています。なんでほんとうは写真にはいないのにそうやって答えるのかなと不思議に思いました。きっと大きいばあちゃんが一人でいてもさみしくないようにそう言ったのかなと思いました。

大きいばあちゃんは、ぼくたちが遊んでいるとうれしそうな顔をして見ています。そしてよく、

「ばあちゃんは、そんなことできんわ。元気やな。」

と言っています。

大きいばあちゃんは、まだ元気だけど、子どもの声が聞こえたり、ぼくたちが元気に遊んでいるのを見たりすると、とても楽しそうです。だから休みの日とかは、みんなでばあちゃんちへ行って、元気なところを見せてあげたいと思います。そしていつまでも、ばあちゃんが元気でいてほしいです。

# お父さんのこと

四年　新田麻湖（玉置）

わたしのお父さんは、やさしいです。勉強を教えてくれたり、遊びに連れて行ってくれたりします。毎年夏休みには、しばまさのプールや海に連れて行ってくれます。だけど今年は、連れて行ってもらえませんでした。どうしてかというと、運動会の人生リレーの時にアキレスけんを切ったからです。

お父さんがアキレスけんを切って、病院にいっている間、わたしは心配で泣いていました。でも、お父さんの顔を見たら、ふざけた顔をしていたので安心しました。お父さんは仕事を五十日間くらい休みました。お父さんは、けがをする前は、ごはんやトイレ、おふろなど自由に行けたけど、けがをしてギプスをまいたら、自由に行動ができなくて、とてもふべんだと思った、と言っていました。

今は、ギプスが取れたけど、まだ少し歩きにくそうです。足がすっかり治ったら一緒に卓球をしたいです。

お父さんは、スポーツが好きです。ゴルフや卓球、野球、スキーなどをします。わたしも、卓球とゴルフとスキーをしたことがあります。お父さんはボウリング大会で一位でした。お父さんが卓球のスマッシュを教えてくれたので楽しくなりました。

お父さんはテレビを見るのも好きです。野球の試合を見たり、ゴルフの試合を見ています。野球の試合では、ろっ

こうおろしを歌っておうえんしています。テレビで野球やゴルフを見ているお父さんは、楽しそうです。

わたしは、お父さんと一緒に、おふろに入るときが好きです。なぜかというと、今日の一日のことを話したり、じゃんけんゲームなどをします。おもしろいギャグで、わらわせてくれたりもします。これからも、おもしろいギャグで、いっぱいわらわせてほしいです。

お父さんは、毎日しが県まで、車でかよっています。テレビや、けい帯電話の画面を作る会社です。大きいえんとつから、けむりが出ていました。仕事のことは、あまりよくわからないけれど、がんばってほしいです。

お父さん、今度は野球を教えてください。これからも、おもしろくて、スポーツが好きなお父さんでいてください。

# 私と家族とダンス

三年　清水永愛（玉置）

わたしは、ダンスを習っています。毎週日曜日がレッスンの日です。ダンスは、とてもむずかしくてなかなかうまくおどれません。だから、家でも毎日練習しています。家でするダンスの先生はお父さんです。お父さんは、まちがっているところをなおしてくれたり、見本を見せてくれたりします。だから、少しずつ上手になっているのかなと思います。

夏休みの最後に、パレアでダンスを発表することになりました。レッスンと家での練習を合わせると、3時間くらいになります。パレアでは、みんなに見てもらうので、まちがえずにおどれるようにがんばりました。お父さんやお母さんもアドバイスをしてくれます。家族がおうえんしてくれるので、毎日がんばれたと思います。

発表の八月三十一日が近づいてきました。わたしは「ちゃんとできるかなぁ。」と言う気持ちになりました。がんばれるかどうかまよいました。でも、お父さんとお母さんがはげましてくれたので、がんばりたい気持ちがどんどん大きくなってきました。がんばれるようになると、ダンスも楽しくなってきました。ダンスの曲をきくと、体がかってに動くようになりました。ダンスを習ってよかったなあと思いました。

本番の日になりました。おどる前は、とってもきんちょうしました。でも、がんばって、かっこいいダンスが見せられるように、笑顔でおどることができました。ダンスもまちがえずにできたので、とってもうれしかったです。

発表が終わると、お父さん、お母さんが、「上手だったよ。」と言ってくれました。まちがわずにおどれて、ほめてもらえたことがとてもうれしかったです。わたしは、これからもダンスを続けていきたいです。

お父さん、お母さん、これからもおうえんしてね！

# ぼくのおとうと

二年　髙本りゅうすけ（武生）

ぼくは、四人きょうだいです。中学生のおねえちゃん、おにいちゃん、ぼくとおとうとです。

三才下のおとうとは、いつもぼくのまねをします。

ぼくとおとうさんがキャッチボールをしていると、ぼくと同じようにグローブをもってボールをとろうとします。そして、ぼくにぶつかってきます。キャッチボールができないので、ぼくは、「どっか、行って。」とおこったり、げんかんにとじこめたりします。すると、すぐなきます。なくと、ぼくが、おかあさんにおこられます。おにいちゃんはそんだなと思います。

・ぼくが、友だちとあそぼうとしてじてん車にのると、同じようにしてじてん車にのってついてきます。おいて行こうとすると大なきして、ぼくがおこられることになるので、しかたなくつれて行きます。一人で行きたくてもついてくるので、いやだと思うことがよくあります。おにいちゃんはたいへんです。

でも、おやつをたべるとき、同じくらいのりょうがあるのに、おかしを分けてくれます。おかあさんにたのまれたせんた

くものとり入れの手つだいを「やって。」とたのむと、やってくれます。ぼくは、のんびりテレビを見ています。そんな時、おにいちゃんはいいなと思います。言うことを聞いてくれて、かわいいなと思うこともあります。

けんかをすることもあるけれど、いつもいっしょにいて、ぼくをたよってくれるおとうとと、これからもなかよくしていきたいです。

## かわいい たくちゃん

一年 ひら田 ゆうな（堤）

たくちゃんがうまれてうれしいよ。
たくちゃんはよくなくね。
「おっぱいのみたい。」ってないてるみたいだよ。
でもかわいいね。
おっぱいをよくのむね。
おっぱいおいしいの？
おいしそうにのむね。
「おいしいよ。」ってい ってるみたい。
おむつもたくさんかえるね。
たくちゃんのふく、かわいいね。
ちいさいね。
わたしも
こんなにちいさかったのかな。
手もちいさいね。
わたしがゆびをだすと
たくちゃんがゆびをにぎるよ。
すっごいかわいいな。
ママはとってもいそがしいね。
いつもしんどそうだね。
だからわたしが
お手つだいするよ。
いろんなお手つだいするよ。
ママ、がんばって。

## 輝きのある 野木の子

5・6年 町小中音楽会

5・6年 町陸上記録会

6年 修学旅行

## 編集後記

異常気象が続く近年。特に今年は九月の台風十八号が、ふるさと野木地区に甚大な被害を与えました。四百ミリを越える豪雨が降り続き、国内で初めて特別警報が発令され、被害の様子は全国ニュースとして、テレビ、新聞等で報道されました。

被災されました皆様に心よりお見舞い申し上げます。また、全国に住まわれる会員の方々に、大変なご心配をいただき、厚くお礼申し上げます。

さて、今回原稿執筆をお願いいたしました皆様方には、ご多忙の中、快くお引き受けいただきましてありがとうございました。お陰を持ちまして、充実した内容の会報に仕上がりました。編集委員一同、衷心より感謝申し上げます。

会員の皆様におかれましては、今後とも、近況などを投稿いただければ有り難く存じます。

末筆ながら、会員の皆様益々のご健康とご繁栄をお祈り申し上げます。